

「日本の家」 3

町家を直す人との対話2 ー自由になるための町家ー

松田：建築の魅力はいろいろあると思っています。たとえば町家の改修みたいなものは、茶道で千利休が魚のかごを花器につかったような、もともとあるものを見直したり、あまり形をつくらないで何かを表すというような魅力があります。もう一つは何か世界を変えていけるような発信力がある建築です。どちらも魅力かなと思いますが、林野さんは、どう考えますか。

林野：そうですね。建築って、すごく自由を教えてくれるものだと思うんですよ。あまりよくない建築って、もう「商品」になっていると思うんです。で、完全にそろったカタログの中から「これとこれとこれ」みたいな感じで、家や、家の中の部分を選んで、消費されていく。買ったときが一番よくて、あとは時間が経つにつれてどんどん価値が失われて・・・。

でも本当にいい建物って、「あ、こういう考え方もいいんだ！」と人間の考え方に自由を与えてくれるものだと思うんです。

松田：自由は重要なキーワードだと思うんですが、林野さんにとって自由とはなんですか？

林野：え？なんだろう・・・

今この段階で「自由とは何か」というと、資本主義社会から離れる、ということなんですよ。

例えば東京で家を借りたいとき、いくらお金をだせるかで、部屋の広さとか全部決まるんですよ。

「一か月 10 万円でこの駅の近くに住みたかったらこの家とこの家があります。」みたいな。建物もいっしょで、「予算は 3000 万円です」といったら、「3000 万円ならこの会社のこのぐらいの大きさの家が建てられます。」ってすぐに選択肢が出るんです。

人間の人生は、いつもそんな感じの選択をさせられているんです。家もそうです。でも、それってすごく自由じゃないと思うんです。ガチガチに資本主義化された選択から外れること、そうではないやり方があるって、お金のあるなしと関係なく、資本主義社会と距離をとって何かできること、それが自分の目指す自由です。

松田：この家を直して住んでいるのも、林野さんの自由のあり方ですか？

林野：そうかもしれないですね。

私にとって自由は、資本主義社会の階級から外れていることかなと思っています。

今の社会はなんでもカタログがあって、それを選んでいくことを楽しむ。特に東京に住む人は、カタログの中から選ぶことしか許されない。そこから抜け出せないのは不自由なことだと思う。でも金沢の町家に住むと、階級の外に出ることができる。それによって自分の自由さを感じることができる。今のカタログから選ぶ生き方から出る自由を、町家の改修を通じて実現できたらいいなと思います。また、空地にゼロから新しく家を建てることは、確かに建てている時は自由なんだけど、まちに対して責任を持つという意味で、すごく不自由なところがあるんです。

「ああ、そうか。お前はあの形の家を選んで、そういう向きでここに建てたんだな」ということを、いつもまちから責められるんです。家ができた時をゼロとしたらずっとそれが続いていくんです。この「まちに対する責任」を、家を建てた人がずっと持ち続けるということは、みんな気づいていないけど、大変なことだと思います。

この、昔からある町家に住んで思ったのは、この家がこのまちの中にあることを、まちの人がみんな知っているということです。そして、受け入れてくれているということです。私に「あ、あなたはあそこのあの家に引っ越してきたのね」「昔私はあそこの家でこれを直してもらったよ」と、コミュニケーションをとってくる人がいる。

つまり、町家にはまちとの向かい合い方の答えが既にあるんです。

だから自分たちはそこに「すっ」と入れればいい。

入ったことで、町から責任をとれと言われない。つまり、責任から解放されるという自由もあるんです。

(1527 字)

(2020.12 Written by Makiko MATSUDA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.